

あなたの演劇批評をお寄せください！

SPAC 劇評コンクール 劇評募集中！

批評することも「演劇活動」のひとつです。
皆様のご応募をお待ちしています！

今回の対象作品は、以下の6作品です。

SHIZUOKA せかい演劇祭

- 『うなぎの回遊 Eel Migration』 ●『マライの虎—ハリマオ』 ●『マジック・メイド』 ●『王女メデア』
- 『Qui som?—わたしたちは誰?』 ●『さあ環境に抵抗しよう、死に抵抗しよう。そうさ生に抵抗するのさ、』

ご投稿いただいた劇評を SPAC 文芸部(大澤真幸、大岡淳、横山義志)が審査し、選評を公開いたします。

■最優秀賞 賞金2万円 1年間 SPAC の全公演にご招待(各演目につき1回1名様)

■優秀賞 SPAC の公演に3回1名様ご招待

■入選 SPAC の公演に1回1名様ご招待

最優秀賞、優秀賞、入選作品は SPAC 公式サイトに掲載します。

募集要項


◎字数:2,000 字程度

◎締切:各公演最終日から1ヵ月以内(郵送の場合、当日消印有効)

◎原稿には、住所、氏名(ふりがな)、ペンネームの方は本名・ペンネーム、電話番号、E-mail・観劇日を明記ください。

◎応募方法:WEB 投稿フォーム、または郵送(手書き可)でお送りください。

WEB 投稿フォームの場合は、Word、PDF、テキストファイルのいずれかのデータにてご応募ください。

WEB 投稿フォーム:  郵送先: 〒422-8019 静岡市駿河区東静岡2丁目3-1 SPAC 劇評コンクール係

◎審査結果は本年度中(27年3月まで)にお知らせします

【注意事項】当該年度に SPAC からの報酬が支払われた方には、最優秀賞の賞金はありません。／今回より E-mail、また FAX での応募は受け付けておりませんので、ご了承ください。※やむを得ず、他の方法での応募をご希望の場合は、事前にお電話 054-203-5730 までご相談下さい。

SPAC 文芸部

大澤真幸(おおさわ・まさち)……社会学者。著書に『不可能性の時代』(岩波新書)等多数。

大岡淳(おおおか・じゅん)……演出家、劇作家、批評家、パフォーマー。

横山義志(よこやま・よしじ)……西洋演劇研究。2008年パリ第10大学博士号取得。

SPAC 公演の劇評は、SPAC 公式サイトでご覧いただけます。
<https://spac.or.jp/critique/>

私の場合、批評というものに影響を受けた原点は、80年代にある。例えば、浅田彰『逃走論』が猫十字社のマンガ『黒のもんもん組』に言及していたことは、中学生の私にとってちょっとした事件だった。こういう作品をさらりと取り上げてみせる知性が登場したことの新鮮さは、中学生にも感じられた。また、吉本隆明が『マス・イメージ論』で高野文子のマンガ『絶対安全剃刀』を高く評価していたことにも、大した目利きがいるものだと感じさせられた。栗本慎一郎は『鉄の処女』の中で、花田清輝の芸術批評は、「最終的に俺は左翼なんだぜ」というポーズさえとっていけばインテリはサブカルチャーを扱っても構わないという、高踏的な姿勢にとどまっていると批判しており、そういう当人は『ビックリハウス』誌上で糸井重里と連載を持ったりして、栗本の存在自体がじゅうぶんにサブカルチャーだった。四方田犬彦は、林達夫の芸術批評はなるほど脱領域的ではあるが、演劇的な“質”を評価するにとどまっており、映画的な“量”の氾濫から目をそむけていると批判していた。いずれにせよ、知識人が余技でサブカルチャーを論ずる時代は終わり、むしろサブカルチャーの直中にこそ、論ずるに値する何かが存在するという予感が、「ニュー・アカデミズム」を中心とした、ニュータイプの知識人たちを突き動かしていた。

演劇批評の中で最も共感したのは、川本三郎の仕事である。サブカルチャー全般が活況を呈する中で、小劇場演劇は——今思えば「演劇バブル」と言いたくなるほどに——高揚していた。高度化した消費社会に対するアイロニカルな自己批評を意図した演劇作品群は、必然的に入れ子構造のような「難解」なスタイルをとりがちだったため、そのエッセンスをわかりやすく解説してくれる川本の批評は、中学時代の私には貴重な存在だった。野田秀樹や鴻上尚史はもちろんのこと、北村想、生田萬、如月小春、渡辺えり子（現・渡辺えり）らの作品が、同時代の音楽・美術・映画・マンガ・文学と同列に論じられ、情報社会化や消費社会化が進展する中で、ディスコミュニケーションに陥った〈個〉がふわふわと浮遊し、浅田彰の言を借りれば「ノリつつシラケ、シラケつつノル」、「微熱都市」なる絶妙なフレーズへと総括された。演劇を始めとするサブカルチャーの批評を通して、同時代の精神を把握し、自分自身の立ち位置をも測定することができたのは、川本三郎のおかげ

であった。

高校時代に入ると、柄谷行人や蓮實重彦の批評に影響を受けるようになった。文学が近代的な「内面」を人々に植えつける制度的な機能を果たしたことを批判する柄谷の批評も、「凡庸」な物語の中に見出される「愚鈍」な描写を肯定する蓮實の批評も、文学や映画を批評することが、そのまま、近代国家のメカニズムを批判的に捉え返すことにつながる、と教えてくれた。芸術批評は単に芸術のためになされるのではなく、個人と社会との関係を変革するためになされるということ、彼らの批評から学んだのである。

かくして私は、大学在学中に演劇批評を書き始めた。それは、演劇を知らない人たちに演劇の魅力を伝えると同時に、その演劇作品を媒介として、私たちが何を考えるべきかを訴えたかったからである。格好つけて言えば、坑道のカナリアの鳴き声から危険を察知し、人々に警告を発する仕事をしてみたいと考えたのだ。つまりところ批評とは、作品を社会全体の動向と接続させ、その作品が示唆している、この社会が向かうべき未来を顕在化＝言語化させる営為なのだろう。以上から、観客であるあなたが、単なる観客であることを超え、社会全体へメッセージを発する方法——それが演劇批評である。ひとりでも多くの皆さんが、演劇批評に挑戦することを期待してやまない。

批評って何？批評なんて必要？
というあなたへ

なぜ演劇 を批評す るのか

大岡淳
(SPAC文芸部)